

黄斑上膜・黄斑円孔とは

眼にはカメラのフィルムに当たる部分存在します。それが網膜で、眼の内側に張り付いた神経でできた膜です。その網膜の中で視野の中央部に存在し、物体を特に鮮明にはっきりと感じることができる部分があり、それを黄斑といいます。

黄斑上膜とはこの黄斑の上に膜ができる病気です。放置すると、視力が低下したり歪んで見えたりするようになるので手術的にその膜を取り除きます。

黄斑円孔とは黄斑に穴が開く病気です。完全な穴が形成されてしまうと、視力は 0.1 前後（遠視・近視・乱視などを矯正した状態で）になってしまいます。

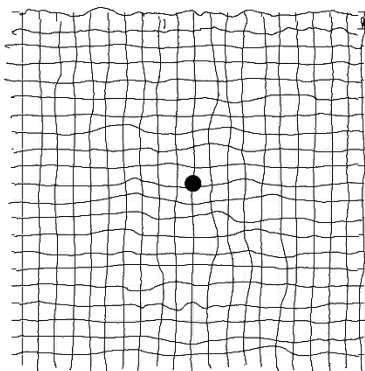
加齢により生じる特発性（最多）と、糖尿病網膜症や網膜剥離、ブドウ膜炎などに続いて生じる続発性があります。

■ 症状

変視症	物がゆがんで見える場合があります
中心暗点	見ようとするところ（視野の中心部）が見えない症状があります
視力低下	進行例では、高度の視力低下となることもあります

■ 検査

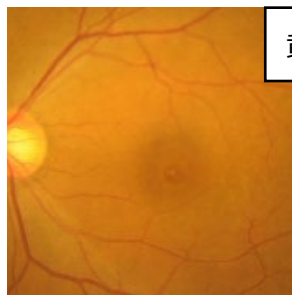
アムスラーチャート



眼底検査

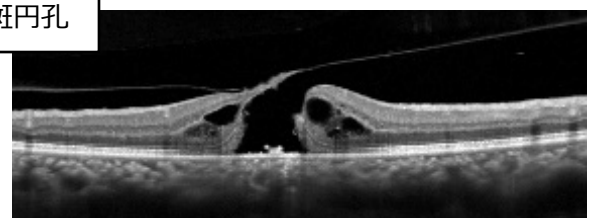
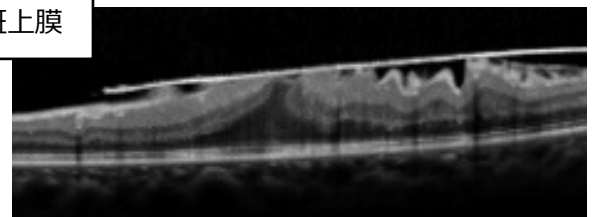


黄斑上膜



黄斑円孔

・光干渉断層計（OCT）



アムスラーチャートでは歪んでいるなどの見え方などを捉えることができます。

眼底検査や OCT で黄斑部を詳細に観察し、診断します。

■ 治療

黄斑上膜、黄斑円孔の治療は**手術**になります。手術方法は硝子体手術といわれるもので、この手術ではまず目の中のゼリー状組織「硝子体」を取り除き、その奥にある黄斑部を特殊な器具を用いて治療を行います。

黄斑は非常にデリケートな場所ですので、手術は高度な技術を要する専門性の高い手術です。

手術中や手術後に網膜剥離などが起こるとレーザー治療や眼内ガス注入を追加します。

ガスを入れた場合は手術のあと数日から2週間程度のうつぶせ安静が必要になることもあります。

■ 当院での実績

当院では最新鋭手術機器を用いて手術を行っています。また手術は、創口をできるだけ小さくした27Gシステム（または25Gシステム）を用いて硝子体手術を行っております。

わずか約0.4ミリの目に肉眼では見えない程度の切り口から極めて細い器具で小切開硝子体手術を行っており、患者様には低侵襲の手術で治療ができるようになっております。

■ 患者さんにお伝えしたいこと

黄斑上膜、黄斑円孔は、手術をしてもすぐによく見えるというわけではなく、改善には数か月単位で要することが多い病気です。また最終的には視力障害や変視を残す方が多くいらっしゃいます。

一般的には時間の経過し、黄斑の状態が悪い場合には視力は戻りにくい場合が多いです。

また人それぞれ進行具合が異なるため、適切な治療介入と注意深い経過観察が必要になりますので、定期的な見え方と眼底の状態の確認を心掛けてください。

■ 本学での取り組み（臨床研究）

1. さまざまな黄斑部の画像所見と術前後の視機能への影響などを検証し、適切な治療介入時期や方法に役立てる研究をしています。
2. 変視症を有する患者様の見え方を、より正確にとらえる新しい検査システムを開発しております。

※に関する本学からの学術論文

Fukuyama H, Ishikawa H, Komuku Y, Araki T, Kimura N, Gomi F; Comparative analysis of metamorphopsia and aniseikonia after vitrectomy for epiretinal membrane, macular hole, or rhegmatogenous retinal detachment. (PLoS One. 2020 May 8;15)